

少し前の話だが、今年の1月28日(日)にNHKで放映されたNHKスペシャル「インドの衝撃 第1回わき上がる頭脳パワー」に、衝撃を受けた教育関係者は多かったのではないだろうか? 筆者もその一人として、日本の現状と対比しながら、筆者の受けた衝撃の内容をまとめてみることにする。

【衝撃その1】正解を得るのが学びの目的ではない。

インドのエリート大学 IIT(インド工科大学)では、答えを教える教育をしていない。IITはインドにおいては、「IITに落ちたから、米国のMIT(マサチューセッツ工科大学)に行く」と言われるくらいの難関大学である。

ここでの教育は、自分独自の考え方を創造することに徹している。例えば、試験は1科目10問で3時間。「正解」を求めているのではなく、問題を解くための思考過程におけるユニークさが求められている。答えが間違っている場合でも、思考過程がユニークであれば高く評価される。

ユニークな思考を重視する教育は大学だけで行なわれているのではない。小学校の数学の教育でも同様。子供達が自分の考え方をどうと述べ、ユニークな考え方は先生から評価される。正解を覚えこませる教育はここには存在していない。

このように思考能力重視の学校教育を受けた学生は、社会に出ても、学校教育で身に付けた個人ごとにユニークな思考能力をフルに活用して、仕事に能力を発揮することができる。技術革新や時代とともに変わってしまう知識(正解)ではなく、課題の本質を把握して個人ごとに異なる方法で解決していくという思考能力は、特定の業界で必要とされるものではなく、業界を問わず求められるものであるため、IITにはコンピュータ関連だけではなく、様々な業界の企業が求人に来てくる。インド国内だけではなく、米国など世界の大手企業が求人に来ており、IITの学生は引く手あまたという状態にある。

さて、日本の教育はどうだろうか? 学校教育の中心は、知識偏重、正解を覚えこませる教育であることは十年一日のごとく変わりはない。正解を多く記憶できる記憶力を持った子が頭がよいと言われ、他の人と異なる考え方をすると変な子と言われる。暗記主体の詰め込み教育の反省から生まれたゆとり教育も、十分にその役目を果たさずに消え去ろうとしている。そのような教育を受け続けてきた学生が、正解が存在しないビジネス社会に出ると当惑し、いままでの頭のいい子というプライドが大きく傷つけられ、精神的な打撃を受けてしまうケースも多く見受けられる。

大学での情報処理教育内容が現状のIT業界で必要しているものと乖離があり、これを解消するための取り組みが様々なところで行なわれているが、議論されている内容はどのような知識(正解)を大学で教えるべきかになっている。知識偏重の教育から思考能力育成

の教育に変えていくことこそ、社会に貢献する人材を育成するための大学教育ではないかという衝撃をインドから受けた。

【衝撃その2】「教える場」ではなく「学ぶ場」

貧困によりケンブリッジ大学に合格したものの留学できなかった人が、予備校を非常に低料金により開設し、自ら教壇に立っている。低料金のため、教室はベンチのような椅子にすし詰め状態。ともかく座れるだけ生徒が座っているという状態である。建物は屋根と柱がかろうじてあるだけで壁がほとんどないため、雨の日には雨がどんどん吹き込んでくる。しかし、雨を避けるために傘を差しながら授業を受けている生徒たちの顔には不満の陰は全くない。学ぶ場が得られた喜びの方が強いようだ。

さらに、30名のIITを目指す選抜クラスがここにはある。成績優秀というだけではなく家庭が貧しいことが条件である。予備校に住み込みで勉強し、授業料はもちろん、食費・生活費もタダ。朝から晩まで猛勉強し、30名の内、28名がIITに合格したという。

まさにここは、生徒自らが「学ぶ場」であって、教師が「教える場」ではない。

日本はどうだろうか？18歳人口が減少し、大学定員数より入学希望者数の方が少ないという大学全入時代に突入し、学生確保に奔走する大学は入試方法を多様化させた結果、大学入学者の基礎学力の低下を招き、大学の授業を十分理解できない学生が多数在籍する大学が増加している。これを解消するために、高校で学ぶべき知識を再教育せざる得なくなり、リメディアル教育という名のもとに、高校の補講を行なっている大学が増加している。高校で十分教えてもらう場を提供されていたにもかかわらず、自ら学ぼうとしなかった学生に対して、再度、大学で教えてもらう場を与えたとしても、本当に学ぼうとするかどうかは疑問である。

自ら学ぼうという意欲のない学生に、どんなにすばらしい教育環境を与えても、教える場であって、学ぶ場でないのであれば、知識を身につけさせることは不可能であろう。

ふと、大学にそのまま残り教員となった学生時代の友人が、以前言っていたことを思い出した。「我々の時代はよい物理の教科書がなく、先生の板書が唯一の教科書だったよな。意味もわからずともかく板書をノートに写し、試験前になると何とか理解しようと、参考になるものを求めて書店をうろろしたり、先生の部屋に押しかけたり。でも、いまは違うんだよ。できのいい教科書や参考書がいっぱいあるんだ。だから、我々もそれに甘えて、あまり板書しなくなったし、たまに板書してもノートに何も書かず、ただ、ぼうっと見ている学生がほとんどだよ。とても学ぼうという意欲が感じられないんだ、いまの教室には。もちろん、質問にくる学生なんてほとんどいないよ。」

環境が整っていない方が、学ぶ意欲を持つ学生が増えるのではないかと考えてしまいたくなるくらいに、大きな衝撃をインドから受けた。

【衝撃その3】IITに入れば、本人だけではなく家族、地域社会まで貧困から救われる。

IIT を卒業すれば、インドの大手企業だけではなく、世界中の大手企業が先を争って求人に来てくる。IIT で身につけた思考能力（知識ではない）が企業にとって大きな利益をもたらすことを先輩達がすでに証明済みのためだ。

そして、社会人として成功した時、彼らは、IIT へ行かせてくれた家族に感謝するだけでなく、支援してくれた地域社会に対しても感謝し、恩返しを当然のことのように行なう。得た富を個人や家族で独占することなく、地域社会の振興のために積極的に寄付するのだ。これにより、家族だけではなく地域社会も貧困から救われることになる。また、これを期待し IIT にいけそうな若者を家族、地域社会は支援する。インドではこのような善循環が回っている。

日本は一流大学に行くためには、私立の進学校に小学校・中学校から入り、学習塾に通わなければならない。そのため、裕福な家庭の子弟しか一流大学に入ることができなくなり、貧困層は子々孫々一流大学に入ることができず、エリート層になることはないという希望格差社会にあるという。

エリートになったとしても、ボランティア精神、社会貢献意欲が養われていない人が多いため、私利私欲を追求したビジネス犯罪が増加している。企業の社会的貢献は CSR と呼ばれ意識されるようになってきたが、個人個人となると危うくなる。まして、地域社会との結びつきとなると、都会を中心にふるさとを持たない人口の増加に伴い、希薄化してしまっているように感じる。

IIT への進学という教育の場を介した個人と家族、地域社会、社会とのかかわりが重要であるという衝撃をインドから感じた。

もちろん、インドと日本ではおかれている経済的状況、産業社会の状況が全く異なるため、単純な比較はできない。しかし、日本がいま忘れてしまったものをインドは持っており、それを目の前に見せられると衝撃を感じざるえなかった。日本の学びの場（教える場ではない）の改善に、この衝撃を活かすことができないかと筆者はいま考えている。

【参考文献】

・山田昌弘著、「希望格差社会 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く」、筑摩書房、2004年11月10日